

森林整備Ⅱ

森の健康診断：意義と実践

日時：平成26年10月18日（土） 10:00～15:00

講師：丹羽 健司（矢作川水系森林ボランティア協議会代表）

概況



科目名 森林整備Ⅱ（森の健康診断：意義と実践）

講師 矢作川水系森林ボランティア協議会代表 丹羽健司

午前中は、矢作川水系森林ボランティア協議会のメンバーと共に4班に分かれ、現地調査（海上砂防池の近隣地域）を実施。

各班は調査地毎に、中心木を選んで幹の1.3mの高さでテープを巻いた。人工林の植生調査として、中心木周辺の5×5mの調査枠をロープで張り、人工林の種類、斜面の向き、斜面傾斜角、落葉層の状況、腐植層の状況、草と低木の被覆率、草と低木の種類数、1.3m以上の樹木（植栽木以外）の被覆率と種類数・胸高直径の調査を行った。

混み具合調査として、枯損木・タケの有無、植栽木の胸高直径、中心木の樹高（ステール巻尺）、中心木と平均直径木の樹高（尺葺）を調査し、それぞれの値から林分形状比、1ha当たり本数、平均樹間距離、相対幹距離の計算を行った。

午後からは、里山サテライトにおいて丹羽先生から講義があり、矢作川水系地域で毎年1回実施してきた森の健康診断が最終年度（10回）を迎え、愛知・岐阜・長野3県7市町村の延べ610地点延べ2400名で調査されたことが紹介された。

森の健康診断が始まった10年前と比べると、現在では全国各地で森の健康診断の取組が実施され、各地域の森の理解促進と森に関心を示す人々のネットワークの拡

大が進行しているとのことである。また、人間ネットワークの拡がりこそが、10年後・100年先の日本の森づくりへの明確な展望が見えてくるのではとのことであった。丹羽先生を中心に午前中の各班の現地調査結果の発表が行われ、1班～3班の調査地では、7本～8本/a、4班の調査地では、2本/aの伐採が必要であると発表され、現地調査の総括が行われた。